

ジオサイトを用いた地域振興-島原半島ジオパークの例-

Local Promotion using academic geological and geographical geosites - an example of Unzen Volcanic Area Geopark, Japan -

楠田 真典^{1*}

Masanori Kusuda^{1*}

¹島原半島ジオパーク推進連絡協議会

¹Unzen Volcanic Area Geopark

はじめに

これまで島原半島は、平成2年から約5年間継続した雲仙岳の火山噴火（平成噴火）とその災害の影響により、観光客は激減し、“被災地域”というネガティブなイメージが定着してしまった。しかし、島原半島ジオパークが日本ジオパークに認定され、さらに平成21年8月に、北海道・洞爺湖有珠山ジオパーク、新潟・糸魚川ジオパークと共に、日本国内で最初の世界ジオパークネットワークに加盟認定された事を契機として、島原半島が災害から復興し、世界に通じる質の高い新たな観光地として注目されはじめた。その結果、マスコミや旅行会社、そして旅行好きの個人客からの問い合わせが増加している。これは、これまで観光の主たる目玉にはなり得なかった「地形」や「地層」が、ジオパークという名の下、学術的な付加価値を内含した新たな観光資源として活用しうる、と言う事を示している。

ジオパークとして新たに観光地化したサイトの事例

世界ジオパークへの加盟認定後に、たくさんの観光客や地元の住民が訪れるようになった場所（ジオサイト）がいくつかある。ここでは、世界ジオパーク認定後に来訪者が増えた典型的な2つのサイトを紹介する。

1：龍石海岸（南島原市）

有明海に面した国道251号線の海岸に突き出たこの場所は、地元の住民が祠を祭る小さな神社があるほかは、特段目立ったものはなく、地元の人が散歩に訪れる程度の場所であった。しかしこのサイトは、島原半島の中央に噴出する雲仙火山が、約50万年前に噴出した地層を間近に観察出来る数少ないサイトであった。そのため、世界ジオパーク加盟認定後は、観光客や地元の住民が、地層の観察を目的として大型バスで訪れるようになった。

2：原城（南島原市）

原城は、徳川幕府の鎖国政策のきっかけともなった1637年の「島原の乱」の主戦場であり、世界遺産の暫定リストに登録されるほどの歴史的な観光地として名高い。しかし、原城が建立されていた海に突き出た高台が、9万年前に起きた阿蘇火山の大規模火砕流が、有明海を渡って島原半島まで流れてくる事によって作られた、と言う事を知る人は少ない。これまで歴史的な側面しか知らなかった旅行者にとって、原城と大火砕流との関係は、これまでとは異なる視点で原城跡を見るきっかけとなり、来訪者の地域の再発見を促している。

他にも、定期的にジオツアーを開催する事により、これまで人があまり訪れなかった、もしくはジオサイトとして見過ごされていた場所にたくさんの人が訪れるようになった。

新たな観光地化に伴う課題

これまで観光地として着目されていなかった場所に多くの観光客が訪れるようになった。これは地域を活性化させるという一方で、いくつかの課題も見えてきている。現在既に問題となっている事例も含めて、ハード面、ソフト面での課題を列挙する；

ハード面での課題

- ・ 駐車場やトイレの整備
- ・ ジオサイトまでのアクセス道路の整備
- ・ ジオサイトまでの交通標識の整備

ソフト面での課題

- ・ ジオサイトを説明出来るガイドの育成と手配のしきみ
- ・ 来訪者のモラル向上（地域住民への配慮）
- ・ 地域住民のモラル向上（観光客に対するホスピタリティの強化）

ハード面での整備は対応がしやすいが、ソフト面の整備、すなわち人材育成や地域の住民を巻き込んだ観光地としての雰囲気作りには時間がかかる。「ジオパークとは何か?」、という概念の啓蒙を含め、行政区域をまたいだ、地域全体が一つのジオパーク作りに取り組めるような体制を長い時間をかけて作り上げていく必要がある。